

## 小説同様に奇なり

ギュンター・グラスの伝記を読む

Michael Jürgs: Bürger GRASS, Biografie eines deutschen Dichters, München 2002

杵 渕 博 樹

### 1.

400 ページを超える大作である。彼の作品も長い、伝記もやはり長い。

書名では「市民(としての)グラス」が前面に押し出され、「作家の伝記」という一種のジャンル表記は、副題として添えられている。

### 2.

さて、「作家の伝記」ではあるけれども、まず第一に「市民グラス」である。

それでは「市民」とはなにか。

グラス作品の読者なら、グラスが「市民」である、というときの「市民」は、少なくとも形式的に「民主主義」が確保された社会における、「政治参加する市民」という意味なのだろうと考える。戦後および現代のドイツに限らずとも、グラスほど政治的プレゼンスの大きな作家はなかなか思い当たらない。彼の作品を読んでもいなくても、現代ドイツの政治・文学に興味を持つ者なら、双方の領域で同時に誰もが認める大物と言えるような人物が彼以外にないことは自明だろう。おれは「作家」であるまえに「市民」だから、当然政治にも係わるよ、というのがグラスの流儀だった。

作家であるという規定は、それだけでは、積極的政治参加に対する要請は含まない。いや、むしろ、ある作家において政治参加が目立ち過ぎれば、「政治的作家」、「政治に熱心な作家」、「一応作家ではあるがむしろ政治家」という、作家としては二流であるかのような、「純粹でない」かのようなレッテルを貼られる場合さえある。

『市民グラス』というタイトルもまた、多少なりともグラスについて知っているつもりの人間には、「やれやれ、また政治の話か」という拒絶反応を引き起こしかねない。しかし、よく考えてみれば、ずっと政治の話と作品紹介だけでは「伝記」にならない。

権威主義者は往々にして「プロ」や「専門家」を信仰し、素人を軽んじる。そのメンタリティに支えられながら、多くの権力者たちもまた、「政治は政治のプロにまかせておけ」、「作家は作品だけ書いておればよい、素人は政治に口を出すな」と言う。ところが、民主主義というのは基本的には素人としての一般「市民」の政治参加を前提にした思想であり、仕組みだ。だから、こちらを支持する人物、たとえばグラスにとっては、「作家」であろう

となかろうと、素人としての政治参加は当然ということになる。民主主義においては「非政治的市民」こそが特殊な存在なのだ。

ということは、「市民グラス」の「市民」は、やはり「ただの市民」、「素人としての市民」なのであって、必ずしも「政治的市民」ということではない。「ただの素人としての市民」から「政治的市民」を差し引いて残る部分にも、相当な中身があるはずだ。

そのあたりから、超人的仕事をこなしてきた怪物級の大物の私生活を覗き見ること、作家の建前の部分ではなく本音の部分を嗅ぎ取ること、読者はそれを期待することになる。

### 3.

冒頭は紀行文風だ。

読者はまずグラスの生まれ故郷ダンツィヒの風景のなかに立つことになる。地勢についての記述に続いて、ギュンター・グラスの血縁に連なるひとびとが登場する。この導入はなかなか魅力的である。さながら大河小説のプロローグのようだ。

そして実際、ナチの台頭、従軍、捕虜生活、故郷の喪失、一家離散、放浪、鉱山労働、家族との再会、美術学校での絵画三昧、ヒッチハイク旅行、ロマンス、幸運な詩人デビュー、パリでの窮乏生活…と、この作家の半生は波乱に満ちている。「描く」ことと「書く」ことについての一貫した執着以外は、まるで行き当たりばったりにも見える運まかせの冒険が、次々と新たな事件に遭遇し、とんとん拍子に成功につながっていく様は、主人公グラスのアクの強さと相俟って、まさに作り話のようなおもしろさである。

もちろん、『プリキの太鼓』による大ブレイク以降こそが、「作家」グラスの伝記の本編ではあるのだが、その前夜にあたる時代には、ロードムービータイプの青春映画になりそうな、爽快な魅力がある。従軍以降、最初の妻アンナとのロマンスと美大生時代は、小説作品からはうかがい知ることのできない時期なので、その分、グラス作品の読者にとっても新鮮である。

### 4.

47年グループへの参加、『プリキの太鼓』での本格的作家生活への突入以降も、この伝記は作家の生活をたくみに語り続ける。本文中で言及されながら挿入される豊富な写真はどれも雄弁にして印象的だ。

折に触れて出てくる、グラスと言えば定番の手料理の話は、彼自身の作品にも登場するし、やや語られすぎた感もあるのでもはや退屈だが、意外にも新鮮なのは、政治関係の話題だ。

政治参加するグラスの主義主張などについてはさらりと要領よく紹介して済ませ、むしろ、生身の人間としてのこの男に接した人物の証言を通して、彼のスタイルが浮き彫りになっている。元首相ヴィリー・ブランドとの交友関係の紆余曲折や、社民党関係者との確

執、ベルリンの壁崩壊時の彼の様子など、臨場感のある情報が、グラス自身の公式発言を相対化しつつ、その人物像を描くための適度な距離感の確保につながっていて、飽きさせない。

70年代終わりから80年代にかけて、社民党のポスト・ブランド時代、グラスの政治活動からは、ブランドを応援したころのような情熱は失われていた。それにも係わらず、選挙となればそれなりに骨を折る作家の様子からは、演説原稿やエッセイなどからではわからない、等身大のリアルな人間臭さがうかがえておもしろい。

作家の人生を語れば避けて通れない作品に関する記述も、そこだけが突出することなく、物語的な滑らかさを持った展開のなかにうまく組み込まれており、邪魔にならない。

質量ともに圧倒的な想像力とドイツ語の使い手としての巧みさがセールスポイントのグラスだが、いわゆるダンツィヒ三部作はともかく、それ以降の作品については、その都度リアルタイムでの作家の日常、作家の私生活に根ざしているということがよくわかる。

現代ドイツ文学史上の巨人グラスも、自伝的叙事詩でデビューしたあと、自分の日常生活をネタにして書き続けた、「私小説」作家だったのだ。

## 5.

「登場人物」の多彩さもグラスの伝記ならではだろう。

作品にも色濃く影を落とす、祖父母、両親、親戚筋のひとびとに始まって、妹、妻あるいは恋人たち、そして子どもたち、そこに数多くの政界、文壇の著名人たちが加わる。

アメリカの出版者ヘレーネ・ヴォルフは、グラスの母親代わりのような役回りで何度も登場するが、当地でのグラス人気は相当なもので、ドイツとはまた違った傾向を持っている。そういう意味では、アメリカはグラスにとって特別な場所だったと言えるだろう。ハーヴァード大学からの名誉博士号授与もずいぶんと嬉しかったようだ。

グラスの作家としての成功の恩人ハンス・ヴェルナー・リヒターを始めとして、インゲボルク・バッハマン、パウル・ツェラーン、ウーヴェ・ヨーンゾン、など多くの作家たちとのエピソードも豊富に紹介されている。

ハインリヒ・ベルの名前が案外頻繁に登場するのも興味深い。彼はグラスとは違って無党派ではあるが、場合によっては政治的発言をも辞さない、頑固なヒューマニストだった。カトリック信者でノーベル賞作家、という共通点にどれだけの意味があるかはともかくとして、信念ある「市民-作家」としてのふたりを、あらためて対比してみたい。

## 6.

それにしても、この作家、金に細かい。

子どものころから商才があったらしいが、自分の作品で少しでも多く儲けようとする抜け目のなさには感心させられる。出版社を相手にしぶとく交渉し、自分の印税のパーセン

テージを極限まで上げさせるばかりではなく、作家仲間のためにも同様の奮闘を買って出るたくましさには脱帽である。この伝記では具体的数字も紹介されているだけに、金を巡る彼の活躍ぶりもまた、なまなましく、リアルである。彼の踏ん張りは、作家たちの待遇一般の改善にも少なからず貢献したに違いない。

海外の大学やゲーテ・インスティトゥートから講演に呼ばれても、ギャラが安ければ絶対に応じず、好条件が提示されれば快諾するという一貫した姿勢や、友人宅に自作の絵画作品を置いてきてはあとから請求書を送りつける（これは例外的事件ではなかったらしく、複数の証言が紹介されている）という神経の太さには、さすが大物は違う、と恐れ入るほかない。

こういうことは、作品や研究書だけ読んでいてもなかなかわかるものではないから、読者にとっては非常に貴重かつ愉快的情報である。

このためらいなく金にこだわることのできる現実主義的生活センスは、政治的しぶとさや、衰えを知らぬ創作意欲、飽くなき生殖本能などと不可分の要素として、グラスという人物の超人的活動を支えてきたのだ。

## 7.

グラスは体験重視の作家である。

荒唐無稽な設定、奇想天外な展開も、その核には体験がある。自分で体験したことしか信じない、というこだわりが、彼の創作姿勢、歴史認識、政治思想の基本だ。そういう作家であればこそ、その「体験」を、彼自身というフィルターの作用をある程度抑制しつつ、横からのぞくことができるというところに、その伝記の特別な意味があるのかもしれない。

彼の作品はつねに時代に密着しており、新作が発表されるたびに、スキャンダラスなまでに物議をかもした。そのような作品を、そのつどの政治状況や、歴史や社会を巡る論争との関係から切り離して考えることはできない。だからと言って、別の時代、別の文化圏に生きる人間が、時代背景についての知識なしで向き合ったときに、彼の作品がまったく無意味であるということにはならないだろうが、そのひとつひとつが文学的事件であった彼の個々の作品を、同時代との格闘ぶりをも含めて眺めたときに、さらなる面白みを味わえるということは間違いない。

文学作品の内容と形式を、便宜的にせよ切り離すなどというのは、いかにも素人じみた乱暴な発想かもしれないが、それが許されるとして、この伝記を読めば、内容のほうはだいたいわかる。

無論、文学の文学たるゆえんが文章自体であることは確かだから、文学に興味のある人間は直接作品にあたればよいわけだが、グラスほどの有名作家で、しかもその主要作品のほとんどが大作で読むのに骨が折れる、となると、いわゆる教養として中身くらいはおさえておきたいというニーズもあるだろう。

「なるほど、グラスというのは、そういう男だったんだな。」

と腑に落ちるような人物像が一冊で把握できる書物というのも、今まではなかったのではないかと思う。

しかも、この詳細なグラス伝には、彼が同時代の社会に作品と直接行動の双方で積極的に係わってきただけに、もちろん作家の歩みを軸にするというパースペクティブ上の制約はあるが、1950年代以降の戦後ドイツ文学史、60年代以降のドイツ政治史の入門書的趣すらある。

とはいうものの、上述のように、グラスの入門書として自信をもって推薦できる一冊ではあっても、これだけの大作である。そもそも手軽なハンドブックではない。そういった勉強熱心な動機なしでも、十分に楽しめるのがこの伝記の最大の美点だろう。これは、政治シーン、文学シーンの大物たちの裏話あるいはゴシップがふんだんに盛り込まれた、ひとりのきわめて個性的な男の創造的・戦闘的人生の物語だ。堂々たるスケールの教養小説としても、それなりに楽しめる。

## 8.

第二次世界大戦末期、10代半ばのグラスは、軍事教練で「エホバの証人」の信徒と同じ班になった。

この教派はあらゆる暴力行為を拒む。

この少年もまた、どんなに罰を受けても武器を取ろうとしなかった。そのせいで、同じ班の生徒と一緒に責任を負わされ、懲罰対象とされるようになった。とぼっちを受けたグラスたちはこの信者を責め、繰り返し暴行を加え、なんとか言うことをきかせようとした。しかしそれでもこの少年は頑として訓練を拒んだ。

そして2～3週間後、彼はいなくなった。強制収容所送りになったらしい。

グラスはこの「不屈の抵抗」のことが忘れられないと言う。

わが国の平和憲法までが危機に瀕し、なにかとキナ臭い今日この頃、私にはこのエピソードが一番印象的だった。